

No. 940

# はたち

今年全国で成人となった若者は193万人。1月15日、この日、北海道から沖縄までの代表89人と都内の成人を迎える若者1200人が参加して、成人の日「青年のつどい」が東京文化会館で開かれました。

街の片隅で拾った「はたち」の若者の意見は、

「20才になったからって別にどうってことないですね。」

「今金もうけがしたい。金もうけたら何やってもいい世の中だからね、金がないのが一番つらい。」

「目標は別にないけどこれをきっかけに将来の目標を見つけたい」

「ほんとに素適な人にめぐりあいたい。」

「恋人をみつけたい。」

「今の社会マヌプロ化されちゃってね、なんか自分の本当の生きがいを見い出せない状態」

「選挙にはここ2、3年棄権するつもり。どこへいれたらいいかわかんない。」

「立候補してる人達が公約とやる事が全然違う事が多い。公約を果たしてほしい。」

「仕方ないからいいだけ。政治はすごく汚れてるでしょう。私の力じゃどうしようもない感じ。政治の事別に感心ない。」

「軍国主義化というのはすぐくわいですね。」

「自衛隊については理想的にいえばない方がいい。」

「腹からうちあけられる人がないから淋しいと思う。」

「火花を散らして生きてみたい。」

様々な社会問題を抱える日本。マンモス都市東京。何か失なわれていくのか。

その中で生きていく若者達。そしてこれから日本をつくりあげていくのもこの若者達。

この若者達の一つの意見である。

# 母の祈り

家族皆んなの食事がすんで、額賀ふじさん（63才）はもう一人分の食事を作る。それは三男久さんの食事である。

額賀久（36才）。10年前昭和37年12月14日、千葉県船橋市で交通事故にあった。コンクリート壁に頭を強く打ちつけたが外傷のない久さんを見て医者は單なるショックで意識を失なっているだけだと説明した。それが誤診であるとわかったのはそれから二カ月後、久さんの頭は脳幹をやられ動物としての機能を失っていた。以来ふじさんの舌筆を越える看病が始まった。一日に6回2時間ごとにやる食事に母の愛すべてをこめる。一回一回のマッサージ、柔道選手でもあった久さんの大きい体はふじさんよりも小さくなってしまった。夜の間も添寝して2度3度と起きる。久さんの正常な寝息を聞きやっと浅いねむりに就く。家を遠く離れることができなくなったふじさんの唯一の楽しみ、それは植木である。入念な手入れで植木は立派に育っている。

意識を失ない寝たきりの久さんの面影をフト植木に見ることがあるという。久さんの看病を続けてもう10年、ふじさんもすっかり年老いてしまった。いつからともなく毎年1回、子供たちが全員集まって元気な顔を見せるようになった。父や母にいまわしい事故の思い出を忘れさせようとする子供たちの心使いである。そんな気持を探してふじさんは真先になってうたう。茨城県鹿島郡旭村、静かな村で幸福に暮らす家族を襲った交通事故。

「久はいつかはお母さんと呼んでくれる。そう自分にいい聞かせながら今日も終りなき戦いに挑む。」